

## CHAPTER 5

# スローレイス、スローコミュニケーション

2003年1月16日(木) 18:30-20:30

速度や効率に縛られていた現代社会の価値観を転換していく動きがじわじわと広がっています。スローフード、スローライフ、スローデザイン。”ゆっくり、じっくり、ゆったり”と場を共有し、人々がともに愉しく時を過ごしていくこと。共有のデザインの根っこには本来、そんなスローな感覚が横たわっているのだと思います。第5回では、『スローイズ・ビューティフル』の著者であり、ナマケモノ倶楽部というNGOの世話人も務める辻信一さんをお迎えして、スローに語りました。



### 辻信一(つじ・しんいち)

1952年生まれ。明治学院大学国際学部教授。文化人類学者、環境運動家。近年はカナダ先住民についての調査の他、エクアドルやミャンマーを中心に環境活動を展開。1999年、「スロー」をテーマにした環境=文化NGO「ナマケモノ倶楽部」を立ち上げ、以来その世話人としてスロー・ムーブメントを展開。著書に『ブラック・ミュージックさえあれば』(青弓社)、『常世の舟を漕ぎてー水俣病私史』(世織書房)、『スロー・イズ・ビューティフル』(平凡社)、『ピーススローソク』(ゆっくり堂)、『スローライフ100のキーワード』(弘文堂)など。

**渡辺保史**——今日は「スロープレイス、スローコミュニケーション」というお題を立てています。このトークセッションの企画は、場を共有して、その中でいろいろなコミュニケーションが生まれたり、何か活動していくことを「共有のデザイン」と捉えて、そのあり方を探ってみようということによってやってきました。こういう共有のデザインって、ゆっくり、じっくりした時間の中で育まれていくべきだと思うんです。要するにそれは、辻さんが広めてくれた「スロー」というキーワードと結構重なるのではないかと感じていたので、ぜひお話をうかがいたいと思っていただけです。

**辻信一**——僕も、渡辺さんのこの『情報デザイン入門』という本、非常に楽しく読ませていただいて勉強になりました。この中に「結節点（ノード）」という言葉が出てきますね。都市やコミュニティの中では結節点のような場所が重要だと。

**渡辺**——はい。実は、メディアテークのコンセプトでも、「ノード」が一つのテーマになっています<sup>01</sup>。

**辻**——結節点というのは、出会いの場所でもあるけれども、スロープレイスという言葉で考えると、最初に思い浮かぶのは、モノや人や出来事が出会っていくというのは結構時間がかかる、ということなんです。経済効率みたいな観点からすると、それに反するような場所というのが、おそらくそれぞれのコミュニティにあったし、だからこそコミュニティはコミュニティだった。僕たちは、そういうものを今までのまちづくりや社会づくりの中で切り捨ててきたんだろうなあ、と。それを今もう一度、何とか取り戻そうとしているのではないのでしょうか。

スロープレイスという言葉は、みなさんは今回初めてお聞きになるかもしれません。これは当然のことで、僕が見つけた言葉なんです。ちょっと変な言葉なんです。渡辺さんも、「スローマップ」という活動をされていると先日お聞きして、これも非常に面白いんですが、その発端になったのがニューヨークの「グリーンマップ」<sup>02</sup>というプロジェクトですよ。同じニューヨークで、一種のガイドブックなんですけれども、「ピースフルプレイス」という、心安らぐ場所、平和な場所を共有していくというコンセプトの本が出ています。スロープレイスと僕が言っているのは、こうしたグリーンマップやピースフルプレイスがカバーしている場所をちょうど合わせたようなものとして考えたらどうか、と。さっきも言いましたけれども、僕らが切り捨ててきたような空間をどうやって暮らしの中に取り戻していくのかという

#### 01. メディアテークのコンセプトでも、「ノード」というのが一つのテーマになっています

せんだいメディアテークの三つの理念のひとつに「ターミナル（端末）ではなくノード（結節点）であること」というものがある。メディアテークという場に集う人々が、そこからさらに新しい発見や出会いに発展していくことを目指そうというもの。残り二つの理念は「最先端のサービス（情報）を提供すること」「あらゆるバリアから自由であること」。

#### 02. グリーンマップ

そこに住む人々の手によって、身近な環境を世界共通のアイコン（絵文字）で表した地図を作る活動。1992年にウェンディ・ブラウアー（Wendy Brower、環境デザイナー）が提唱した。現在40カ国以上、220以上の地域が参加しており、日本でも30以上の地域で活動が行われている。

意味を込めたコンセプトだと思っています。

**渡辺**——では、スローマップやグリーンマップについても後ほどお話しさせていただきます。まずは、なぜ辻さんがスローというキーワードに行き着いたのかを振り返ってみましょう。ちょっと大げさになりますが、辻さんは一体どんな生き方をしてきたのでしょうか？ きっと、あちこちを旅されてきたんだらうな、というのは、『スロー・イズ・ビューティフル』からもうかがえますが。

**辻**——スローという言葉に行き着いたのは、環境運動に関わる過程からです。環境運動の中でその概念ができたわけだけでも、僕の個人史の中で考えてみると、もうちょっと前にさかのぼれます。

まず、僕が育ってきた少年時代は、いわゆる高度成長期、ちょうど東京オリンピック<sup>03</sup>の前後にあたります。今の若い方々の感覚でいうと、サッカーのワールドカップで大騒ぎしていた以上に、もっと大騒ぎになっていた。それは大変な勢いで物事が加速していく、そんな時代ですね。子どもながらにいつもそれを感じていました。明日はもっと今日よりはいい。今年よりも来年がいい。今の時代よりは次の時代がいいし、今の世代よりは次の世代がいい。よりよくならなければいけないし、よくなるんだという、何か変な信仰みたいなものがあった。誰に教えられたわけでもないんだけど、これが時代の雰囲気だったんですね。

そういう中でただ受け身的だったわけではなく、違和感も感じていたんです。どんな違和感かという、ふと気づいてみると、周りの風景が何かすごくガサガサしてきたんです。特に工事中の場所が異常に多いわけです。僕は東京生まれの東京育ちですけども、何かしょっちゅう工事をしている。うるさいし、何か汚いんですよ、美しくない。これは1年後、2年後、東京オリンピックが終われば……と、そのうちに全てキレイになると思い描くんだけど、いつまでたっても終わらないんです。

**渡辺**——オリンピックが終わってからもずっと続いている感じがすると。

**辻**——結局、次から次へ、大阪万博などさらなる社会イベントが続いていくと。今だってまだそんなところがあるでしょう。サッカーのワールドカップが終わる前から、渋谷駅の前にはもう「次の万博まで何日」と電光掲示板が出ていたりしますしね。結局わかったわけですよ、「これは終わらないんだな」と。つまり、僕らの風景というのは、こうい

### 03. 東京オリンピック

1964年に日本で初めて開催されたオリンピック。それに伴うインフラの整備で「オリンピック景気」という言葉も生み出した。日本は高度経済成長期の波に乗って一般家庭では「3C」（カー、クーラー、カラーテレビ）が普及した時期。

うふうに掘り返され、荒れた風景がずっと続いていくんだということが分かったんです。

**渡辺**——それは、僕も若い頃、幼いながらに何となく感じていたような気がします。

**辻**——終わらないという感覚は、一方では前進や進歩を疑わないということなのですが、他方では美しさや安らぎというものをあきらめていくことにもつながっていたんじゃないか。何というか、幻滅が背中合わせなんですね。僕は、そのうち日本が嫌で嫌でたまらなくなって、日本を飛び出して北アメリカに行く。合計すると15年以上、海外で暮らしてきたんです。海外の中でもなぜ北米へ行ったかということ、黒人音楽が好きで、ただそれだけなんですね、考えてみると。

そうすると、そこに少数民族と呼ばれている人たちのコミュニティがいっぱいあって、そういうところに入り出すようになりました。黒人のコミュニティ、ユダヤ人のコミュニティ、ポルトガル系であったり、日系、インディアン……僕の好きな少数民族といくつも出会いました。それらのコミュニティが実に居心地よかったです。これは衝撃的だったんです。たとえばユダヤ人のコミュニティに行くと温かく迎えられるんです。その温かさというのは何なのかなと思うのですが、たとえば、「サバト」という聖なる日が毎週あるわけです。キリスト教と違って日曜日ではなくて金曜日の夜から始まって、土曜日に至る。一日が夜から始まるんです。

ところで、**結城登美雄** 04 さんという方、仙台在住のみなさんはご存じですか。さっき彼と会ってこの話をしていたら、「実は東北でもそうなんだよ。日本も昔そうだったんだ。一日というのは夕方から始まる」と。この前、結城さんが北上町の正月を取材されていた。お正月様というのは夕方に来る、正月は12月31日の大晦日の夕方から始まるのだそうです。で、ユダヤ人のコミュニティに戻りますが、彼らは金曜日の夕方になると、家族が集まってろうそくを灯すんです。そこに何とも言えない緩やかな時間がある。この緩やかな時間というのは、この2000年ぐらいの間に、ユダヤ人は迫害されて世界中のいろいろなところに行くわけだけれども、その間もずっと一緒に生きてきた時間なんです。そして、次の日にはシナゴークという寺院に行く。その雰囲気も僕はすごく好きです。

日系人にもこれに近い雰囲気があります。移民の一世が日本から持ってきたような緩やかな時間の流れをわりと頑固に守っているんですね。今の日本人よりもずっとそれを大事にしている。ともに食べること、いろいろな儀礼、人間関係における思いやりやいたわり、そういう

#### 04. 結城登美雄 (ゆうき・とみお)

1945年生まれ。民俗学研究者。地域資源調査にはじまる地域づくりに関わり、地域アドバイザーとしても活躍。著書に『山に暮らす海に生きる』がある。

うつながりや緩やかな時間という価値を非常に大事にしている。だからといって、ガチガチで頑なというわけでもない。おそらく、少しずつ変わっているんだけど、その変化がたぶん穏やかなんですね。北米の主流社会の中に少数民族がぱっと飛び乗っていかないで、そこで生きていながらも、緩やかな独自の時間をどこかに持ち続けていく。もちろん、移民という立場ですから、それは一生懸命働くわけですが、一方で守り続けているものがあるんですね。

そんなコミュニティで感じた事柄が僕の中で少しずつ続いていて、そのあと第三世界と言われる場所、僕の場合は最近特にエクアドルというところに通っていますけれども、あとはカナダの大自然を背景にした先住民族、ネイティブアメリカンの場所などへと無理なくつながっていった。こうした豊かな自然を背景にした場所では、今や環境破壊が大問題なわけです。環境運動に僕はのめり込んでいくのですが、そこで時間と環境をめぐる問題をやはりテーマとしてずっと抱いてきました。環境問題というのは結局文化の問題、時間を軸にした文化の問題だなという感じ方を持っていました。そうこうしているうちに、南米でミツユビナマケモノ<sup>05</sup>という動物に出会ったんです。

**渡辺**——それは、森の中で実際に野性のナマケモノと出会ったんですか。

**辻**——森の中を歩いていて、ふっと出会ったわけじゃないんです。熱帯雨林の伐採がどんどん進んでいて、原生林が切られていく。そうすると、ナマケモノが伐採の副産物みたいに、彼らは動きが遅いからそのまま伐採木と一緒にぼろぼろ出てくるわけです。そういう形で出会ったんです。つまり決してハッピーな形ではありません。捕獲する貧しい現地の人々の中にはひどいことをする人もいるわけです。意味もなく虐待したり、腕を折ってなべの中にぶち込んで食べたり。伝統的な文化の中にあつたものではなく、どうしてこんな残酷なことができるのかなというような場面が起きるんです。そんな光景を仲間たちと見ていて、何か今の世界のあり方がここに象徴されているんじゃないか、こんなに人に迷惑もかけない無害な動物までどうしてこんなふうに残酷に扱わなければいけないんだろうなあ、と。そういう出会いだったわけです。

最初のうちは「ナマケモノを守れ」「森を守れ」みたいなことを言っていたんですけど、ちょっと調べてみると、ナマケモノというのはすごい動物だと分かってきた。これは「ナマケモノを守れ」どころか、ナマケモノが我々を守る、つまりナマケモノの知恵みたいなものを僕らがもし学べなかったら、21世紀を人間が生き延びていくのは非常に危ういんじゃないかと思うようになっていきました。そこで、「ナマケモノを守れ」から「ナマケモノになるう」に変わったんです。世界中にゾウを守

#### 05. ミツユビナマケモノ

ナマケモノ科の一種。頭胴長50-60cm、体重4-5kg。剛毛に覆われている。ホンジュラスからアルゼンチン北部の森林辺縁部や川辺の林に住む。四肢の先端には長くて丈夫な鉤爪があり枝に吊り下がりながら生活している。

れ、トラを守れという動物保護の運動はいろいろあるけれども、おそらくその「動物になろう」という運動は今までになかったんじゃないでしょうかね(笑)。

**渡辺**——確かにそうかもしれないですね。それで、日本に戻ってこられた。ナマケモノ倶楽部自体はいつごろからやられているんですか。

**辻**——結成したのは1999年です。また後でCDを聴いてもらいたいのですが、僕の親友でアンニャ・ライト<sup>06</sup>というシンガーソングライターであり、国際的に活動している環境運動家がいる、彼女と一緒にエコツアーを組んでみんなでエクアドルに行ったとき、そこで盛り上がってきたのがナマケモノ倶楽部です。

**渡辺**——ナマケモノ倶楽部はナマケモノになろう、学ぼうということなんですけれども、具体的に何をしていますか？ 何もしないということですか。怠ける、ひたすら怠ける(笑)。

**辻**——そう、怠けるんです。一方ではもちろんエクアドルを中心に、結構怠けずに(笑)環境運動をやっていますが、ナマケモノ倶楽部の面白いのは、いろいろなところでいろいろなことをやるのも大事だけれども、結局のところ何が一番大事かといったら、僕ら自身がスローダウンすること。たとえばせせせと飛行機に乗ってエクアドルに行って植林するのもいいですよ。いいんだけど、日本での自分の暮らしを見直すのが基本でしょう。世界的に考えたら、日本人やアメリカ人が今の一割でも二割でも三割でも生活をスローダウンさせることができれば、地球はほっと一息つくでしょうね。

だから、怠けるというのは、昔のボイコットという言葉と似たようなニュアンスを含むけれども、もっといろいろなことができるんだということを行っているんです。たとえば、電気を夜2時間だけ消そう。これは、あとでみなさんにもぜひ呼びかけたいです。それから、僕は水筒を持って歩いているのですが、これも僕の怠け方なんです。日本に帰ってきて一番違和感があったのは自動販売機です。全国に550万台あるんです、自販機が。そのうち飲み物を冷やしたり温めたりする機能を持ったものが260万台、休みなく動いている。あんなものは僕の美的センスにも合わないし、非常に醜いなあ、と。

**渡辺**——ほんと、夜もこうこうと明るいんですよね、夜中に自販機がずらっと並んでいるすごい光景に出くわしたりしますよね。

#### 06. アンニャ・ライト (Anja Light)

シンガーソングライター、環境活動家。10代より環境・反核運動に携わり、オーストラリア、マレーシア、日本を中心に活動、現在はエクアドルを拠点とする。ディープエコロジー哲学に基づく環境教育を実践している。1999年、NGO「ナマケモノ倶楽部」を結成。



ナマケモノ倶楽部

辻——あれを動かすだけで、10年前の資料でも原発1基分の電気が必要だということです。これは、渡辺さんの言い方をすれば、すごいバッドデザインです。ひどく醜いだけでなく、社会的に非常に悪いデザインだと思います。だって、夜中の寒空の下でいつ来るとも知れぬ客をじっと待ってコーヒーを温めておこなっておかしいですよ。それがこれだけばこるというのは日本だけでしょう。そういうものはやはり嫌だと思うから、水筒を持ち歩くというのは僕なりのポイコット運動なんです。これは一度持ってみるとやめられない。怠けるというのは、要するにそういうことなんです。

僕は「アンブラギング」という言葉も好きです。12月の初めに僕の尊敬していた思想家のイヴァン・イリイチ<sup>07</sup>が亡くなりました。彼がアンブラギングということを言っていました。イリイチというと、すごく古びた思想のように見られている節があったけれども、僕はアンブラギングはますます新しい素敵な考え方になってきていると捉えています。

考えてみると、僕らというのは、スパゲティー症候群のような状況になっています。ご存じですか、よく病院でいるいるなチューブをつけられている患者さん、特に、死に至るベッドに横たわっている人がいますよね。これをスパゲティー症候群と言うらしいのです。僕もそのような方を見舞った経験があるのですが、夜中になるとチューブを外そうとするんです。もう無意識の中で外してしまう。看護婦さんは「困っちゃうのよね」なんて言っているけれども、僕は、あれは人間が最後の尊厳をかけてやっている行為のようにも思えるんです。死ぬときくらい自分らしく死にたいという。そこから考えてみると、僕らはまだ決して死に至るベッドにいるわけじゃないんだけど、僕たちの暮らしぶりというのは実はものすごくたくさんのチューブにつながっていて、一つ抜かれると生きることが難しくなるような状態にさせられているんじゃないか。

渡辺——電力、水道、ガス、通信、いろいろなインフラにつながっていますもんね。

辻——Y2K(コンピュータ2000年問題)<sup>08</sup>の騒ぎがあったでしょう。あれは、今考えると楽しかったな(笑)。不謹慎かもしれませんが、また何かあいう出来事があるといい、なんてちょっと思っています。なぜかという、改めて僕らの今の暮らしぶりの危うさや、どれだけチューブに依存している一種の植物人間であるかを目の当たりにできる、またとない機会だったからです。

怠けるというのは、そういうチューブなり管なりプラグを抜いていく、

#### 07. イヴァン・イリイチ (Ivan Illich)

1926年生まれ(2002年没)。歴史学や神学を学び、大学で中世史を講義する一方、専門領域にとられない鋭い文明批評を行った。「コンピアリティー」(相互親和性)をキーワードに、教育、技術、思想、生命など、多岐にわたる対象を取り上げ、産業化社会の抱える問題を提起した。著書に『脱学校化の可能性』など。

#### 08. Y2K (コンピュータ2000年問題)

ある時期までのコンピュータが西暦の下2桁で処理されているため、2000年を迎えたときに起こると予想されるさまざまな問題のこと。

抜けるところから抜いていくことです。抜きっ放しじゃなくてもいいんです。一回抜いてみると違う可能性が見えてくる。だからこそ、アンブラギングもあるけれども、リブラギング、もしかしたらアンブラギングそのものがほかの可能性とのつながり直しでもある。情報デザインも、おそらく同じですね。関係の組みかえを意味していて、それは決して僕らが想像するような絶望ではなくて、むしろ希望がそういう試みの中にあるんじゃないかなと思います。

**渡辺**——今までつながっていなかったものをもう一回つなぎ直すということが、最初の方で話題になった結節点のような場所がまた見直される、そういうものを求めているところに多分通底しているんでしょうね。

**辻**——「抜く」というのは、おそらくものすごい恐怖なんです。僕は恐怖の中で暮らしているなという気がするんですね。2002年4月に、22日のアースデイ 2009 から一週間テレビを消すという呼びかけがカナダから来て、僕はナマケモノ倶楽部でそれを「消テレ週間」「テレ隠し」と自分で勝手に宣言して、やりたい人はやろうよと言ったんです。

僕が想像したのは、プラグに手をかけるときに震える人のこと。つまり、これを抜いちゃうと決定的に自分は何かとんでもないことになるんじゃないか、社会から取り残されるという恐怖に駆られるんじゃないかと。子どもたちなんかはそうですね。自分が持っているものを一つやめにするということは大変な勇気がおそらくいるんですね。それは便利という言葉のすぐ裏側にある恐怖。この恐怖が僕たちをプラグ オンの状態にしておく。愉しいからじゃないんですね。また、便利さというのは自分の能力をいわば削り取っているようなもので、一つ便利を得るということは自分の能力が一つ減るということをおそらく意味している。一つ便利が増えるということは、つながりが一つ断ち切られる。

**渡辺**——それだけテクノロジーなどに自分の機能を譲り渡している。自分はもうそれで退化してしまうわけですね、それに関しては。

**辻**——本の中でも僕は言っているんだけど、生きる技術、これはイリイチも言っていますが、「技術」という言葉のそもそもの意味は「アート」なんです。その「アート」というのは生きるアートだったんじゃないかと。それがいつの間にかすごく特殊な表現の形を「アート」と呼ぶようになってしまった。コミュニティの中で歌を歌っていた人も、いつの間にかアーティストと呼ばれるようになった。そうなれ

#### 09. アースデイ

1970年4月22日に米国の市民運動家デニス・ヘインズの呼びかけではじまった地球環境運動。全米各地では、歩行者天国やエコロジーフェアなどが行われた。日本でも市民運動全国センターを中心に、毎年各地でイベントが開催されている。



ばなるほど、僕たちの側からアートがどんどん奪われて、ふっと気づいてみると何もできない自分があるわけです。何もできない。家の中に暮らしていても自分の家に関して何一つできないダメなお父さんなど。やはり女の人の方がまだまだ生きるアートが豊かですよ。そうですね。家での中のアーティストは完全に女の人のですよ。それに比べて男は何もできない、外に出れば技術者やアーティストと呼ばれていたりして。どうですか、渡辺さんはおうちではアーティストですか？

**渡辺**—— 普段は家で仕事もしていますから、いわゆる会社員のお父さんに比べれば、ごくたまにご飯をつくったり、子どもと戯れもしますが、でもやはり妻にはかなわないですよ。そういうのを日々痛感しながら生きています（笑）。

**辻**—— 女にはかなわない。

**渡辺**—— いや、そういう意味じゃなくて。たぶん、個人として僕の連れ合いはアーティストとしては相当いいレベルなので、僕はもうそれは彼女を尊重する意味でできるだけ手出しをしないようにしようという感じです。それは逃げかもしれないけれども（笑）。

**辻**——（笑）。みんなそう言うんですよ。生きるアートが出てきたので、別の話題になるんですが、さきほどふれた結城登美雄さんのお話をしますね。主に東北を背景にして村をずっと訪ねて、現代の宮本常一<sup>10</sup>ともいうようなすごい人なんですけれども、この人が北上町で今やっている調査のことです。彼は食文化をテーマにしているんです。いわゆる日本のスローフードの原点を知っている人です。彼は一年かけて徹底的に北上町の食文化を調べているようで、まず言葉をずっと採取しているんです。煮るとい言葉がある。で、煮方を区別する言い回しが一体どれくらいあるのかを調べたんです。煮しめ、煮つけ、煮びたし、煮ごごり、煮方にもいろいろあるわけでしょう。調べたら何と、29もの語彙があった。あと、焼き方が15、揚げ方が8通り、そして一番驚いたのは切り方です、角切りや、うるこ切り、とあげていたら全部で39もあった。生きる技術、アートというのはこういうことだなあと感じましたよ。それをおばちゃんたち、おばあさんたちがずっと伝えているわけです。それは、都会、東京中心の日本のメディア、教育、企業が考えてきた技術観、アート観みたいなものと、ずいぶんと隔たっている。たぶん、普段都会的なメディアに属している人たちが知っている切り方なんて、一つか二つぐらいしか、語彙と

10. 宮本常一  
(みやもと・つねいち)

CHAPTER1の17(P28)を参照。

してはないかもしれないですね。

**渡辺**——語彙としてはなくても、機械にプログラミングされたやり方に慣らされているのかもしれないですね。

**辻**——そうすると、最近よく教育の分野で「生きる力」という言葉がキーワードになっていて、子どもにいか生きる力を与えるかなんて文部科学省は言うわけだけれども、生きる力というのは実は「生かす力」ということなんじゃないのか？ と、結城さんは問うわけです。生かす力、たとえば食べ物でも食材でもいいです。切り方や煮方、焼き方というのは、素材をどう生かすかということでしょう。僕はそれに一つ付け加えたんだけど、生かす力というのは結局、自分が大自然、生態系、そして自分を取り囲んでいる人々、コミュニティ、家族の中で自分がどう生かされるかという技術でもあるんじゃないかと。そういう意味では、本当に大都会の中の現代生活というのは生きる力がひどく枯渇し、衰弱しているとしかやはり思えないな。

**渡辺**——生かしたり、生かされたりする力を身につけるためには、今言われた生態系やコミュニティなどと自分とのつながり、目に見えていなかったり、忘れ去られていたりするつながりを発見していくということが第一歩じゃないかと思うんです。僕が情報デザインと言っているのも、別にカッコいいデジタルコンテンツをつくり出していく専門的な技法だけでなく、見えないつながりを見つけたり、組みかえていったりすることかなと、今の話を聞いていますます実感しました。そのように言いかえるべきなのかなと思ったんです。

**辻**——そうなんです。それを渡辺さんも本に書かれていて、全く同感なんです。ずいぶん違う内容を扱っているように見えるけれども、実は僕の本と渡辺さんの本というのは非常に似たこと、本質的には同じことを言っているんじゃないかなという気がしています。そのつながり直しというか、切られたつながりをもう一回取り戻していくという作業は、考えてみると時間がかかることです。経済の中でいう効率というのは、科学技術もそうですけど、どこかつながりを切り落としていくという側面がある。何かとつながっているということは面倒なことです。非効率なことが多いわけです。二人三脚でも足がくっついているからすぐ動きにくくて、遅くなりますよね。あらゆる人間関係、どんな人間関係でもやはり時間がかかるし、非常に非効率だと感じる場面が非常に多い。おそらく昔はそう思わなかったことが現代生活の中ではますますそう思われている。若い人の中には、友

人関係を機能別に分類する方法があるらしいですね。これも一種の情報デザインなんでしょうけれども、何々用の友達という、聞いたことないですか？

**渡辺**——たとえば食事用や雑談用ですか？

**辻**——大人の社会、あるいは産業経済的な領域の中で普段みんながやっていること、たとえばクライアントを分類することを応用しているだけなのかもしれませんけどね。

僕らの古典的な、かつての考え方では友人なんていうのは、まさに結節点みたいにいるいろんな機能が重なっている関係です。一番その機能がグチャグチャに集中しているのが夫婦でしょう。よく人類学者が言うんだけど、夫婦というのは奇跡だと。うまくいく方がおかしい。

**渡辺**——うーん、実感だな(笑)。

**辻**——一つの環境の中にもものすごい多機能が集中しているわけですから、それは大変ですよ。そういう大変さみたいなものを、若い人は非常に敏感に感じていて、おそらくそういう分類も出てくるんでしょうね。

**渡辺**——その方が何か効率的なんですかね。

**辻**——後腐れがない恋愛、あるいは傷つかない恋愛とよく言われます。そんなことの現れが、機能別の友達分類なんでしょう。とにかく、つながるといのは非常に面倒くさい。夫婦の話をしたけれども、子育てなんて、世の中におそらくこれ以上非効率で面倒くさいものはないでしょうね。もし効率的な子育てがあったら……。

**渡辺**——うーん、怖いですね、それ。ちょっと想像してみたら。

**辻**——怖いけれども、僕らはやはりそういう状況になっているんじゃないか。

**渡辺**——そうになっているのかな。確かに、学校なんて効率的に人間を生産する装置として機能してましたもんね。

**辻**——40人学級を30人学級にするということを、大変な議論をして長い時間かかってできないでしょう。できないということは、要す

るに効率的じゃないからでしょう。子どもたちはそれを感じていますよ。週休2日になってからしばらくしてアンケートをとってみると、大人たちが不満ばかり言って、子どもたちはあれを聞いてどう思いますかね。つまり、親たちというのは「愛しているよ」なんて子どもたちに口では言っているけれども、実際は効率性の方をとっているじゃないか、と子どもは感じていると僕は思いますね。僕たちの社会は、何か「効率的な子育て」という一種の悪魔の誘いに半分魂を奪われている気がする。

**渡辺**——メディアを通してのエンターテインメントやゲームや学校、そういう社会的な装置をお願いしているのが、ある意味では効率的な子育てかもしれないですね。自分でじっくりと付き合うのができないというか、そういうことをしなくなっているということなのかな。

**辻**——『スロー・イズ・ビューティフル』の中でも紹介したんだけど、ルーマニアで独裁政権が崩壊<sup>11</sup>して、非常にショッキングなことが後になってわかってくるんです。独裁政権の最後の数年間、いわゆる生産力主義がものすごく徹底されたんですね。生産力主義というのは、効率優先ということで、これは決して資本主義だけでなく、社会主義と呼ばれた国々でも同じだった。で、それが行き着いた先というのは、子育てはあまりに非効率だという観点です。子どもが生まれて、その一人ひとりの個性を尊重して膨大な時間と愛情をかけて育てるなんて、こんなことやっていられないという発想です。ちょうどモノをつくるように子どもを大量に同じ施設に入れて、人間を生産しようよと。本当にそれをやっていたわけですよ。そしたら、施設の中に大勢いた子どもたちが、最後の数年間は毎年3分の1ずつ死んでいくんです。なぜ、そんなに死んでいったのか？ 飢えていたとか凍え死んだということではないんです。生存に必要なものは全部一応あるんです。屋根もあるし、食べ物もある。でも、抵抗力がないんです。ちょっと風邪を引くとみなそのまま死んでしまうわけです。その後、寄ってたかっているいろいろな科学者が調べて、結論は何かというと、非常に単純で、結局、愛がなかった、愛情がなかったということなんです。僕らはよく「愛がなければ生きられない」と言うんだけど、それはただ歌の文句や、ポエティックな言葉であるばかりではなくて、科学的に見てもやはり人間はそういうものだということなんじゃないかな。愛、僕はそれを「スローラブ」と言うんだけど、やはりこれは時間がかかるものなんじゃないか、非効率なものなんじゃないか。そうであるからこそ愛は愛なのでしょう。愛する喜びや、愛される喜びというのは結局、非効率で面倒な、ゆったりとした時間でしか育むこ

#### 11. ルーマニアで独裁政権が崩壊

東ヨーロッパの一角で、1989年12月に起きたティミショアラ事件（治安部隊による反体制派デモの鎮圧）が発端となり、多数の死傷者を出した市街戦の末、チャウシェスク大統領による独裁政権が崩壊、大統領夫妻が処刑されるニュース映像は世界に衝撃を与えた。

とができないんですね。

**渡辺**——結論に至っているような気がして、思わずこれで終わりたくなってしまいました(笑)。が、引き続き議論していきたいと思います。スロープレイスやスローコミュニケーションというものに至る、本質的なお考えを具体的にうかがっていきます。実際に辻さんが関わっている、辻さん流の共有のデザインの現場みたいなものがいくつかあると思うんです。たとえば、「カフェスロー」<sup>12</sup> がそうですね。カフェスローに関しては、先ほど「スローカフェ宣言」という紙をお配りしているので、それを見ながらお話をうかがっていきます。このカフェは、東京の国分寺から歩いていけるところにあるんですね。

**辻**——歩いて12-13分でしょうか。

**渡辺**——どんなカフェなんでしょう。僕はまだ行ったことがないんです。

**辻**——これは仲間たちとつくったお店です。僕が教えている大学のゼミの学生にもみな手伝ってもらって、もともとは倉庫だったような建物を改装してつくりました。「ストローベイルハウス」<sup>13</sup> に僕らは注目してまして、これは欧米で非常に盛んになっているんですけども、わらの家なんです。稲わらなどを積み木みたいなブロックにしめて、それを積んで壁をつくるという面白い工法で、究極のエコハウスというんでしょうか。わらという素材は、その地域のもんですね。稲作の副産物で、毎年毎年できますから、こういう再生可能なものを材料にして使い、その建物に人が住まなくなるときには、また建物自体が土に返っていくという性質を持っています。しかも、非常に高度な断熱性など、いろいろな面で健康にもいいし、エネルギー効率もいいので、とにかくやってみようと考えました。ストローベイルを壁にして、ついでにカウンターもつくっちゃえとか、椅子までそれをつくっちゃえ、と。僕は椅子には最初反対したんです。その上に座っていたら数ヶ月で崩れるんじゃないかと思ったのですが、今や2年近いだけけれども、まだ崩れないで使える。もし崩れたらまたつくればいいという、ただそれだけのことなんです。そこに土をかぶせてつくるという工法です。

僕らナマケモノ倶楽部の運動は、中南米のコーヒーと非常に密接な関係があるんです、フェアトレードで輸入する有機無農薬のコーヒーです。僕らがスローダウンすることによって環境の問題に寄与することができるとさっき言いましたが、たとえばコーヒー、たかがコーヒー

## 12. カフェスロー

エコロジカルなライフスタイルを提案するカフェ。東京都府中市に、2001年5月にオープンした。2004年5月、三周年を記念して、『カフェがつなぐ地域と世界—カフェスローへようこそ』（自然食通信社刊）が出版された。著者はオーナーの吉岡淳さん。



## 13. ストローベイルハウス

藁のブロックを積み上げ、上から土を塗り上げた家。19世紀後半にアメリカ、ネブラスカ州に生まれ、1990年頃から環境に負荷を与えない建築として世界中で注目されている。

ですけれど、これは石油に次ぐ貿易高なんですよ。第二の重要産品なんです。つまりコーヒーとのつながり方、コーヒーの消費の仕方をちょっと変えるだけで世界は変わるんですよ。僕らは「コーヒーで世界が見える」「コーヒーで世界が変わる」なんて言っていて、向こうの生産者、特に僕らが親しいのはエクアドルやブラジル、メキシコなんですけれども、この現地の人たちと一緒に生産者・消費者という区切り方を越えてつくっていかないかと。

**渡辺**——もう少し、フェアトレードについて説明してください。

**辻**——フェアトレードって、実は変な言葉なんですよね。トレードというのは交易ですから、もともとお互いの間にフェアという感覚がなかったら成り立たないのが本来のトレードです。何か交換するときにフェアじゃないと思ったらそこで終わりなんだけれども、なぜか、今やわざわざトレードにフェアをつけなければいけない。それぐらいこれまでの交易や貿易はフェアじゃないわけでしょう。それで成り立っているのがグローバリズムですよ。本当に僕らがグローバル化や国を越えたつながりということを考えるんだったら、もう一度原点に戻ろう、トレードを成り立たせていたフェアさみたいなものに戻ろうということだと思うんです。

では、何と何の間のフェアさかという、それは単に売る人と買う人ではなく、実は都市と農村、都会と田舎、生産者と消費者でもいいんだけど、そればかりではなくて、自然生態系と人間にもフェアさがあるわけです。人間にとっていくらフェアに見えても、生態系の方がもう音を上げて持続可能じゃないよと言っていたら、これはフェアじゃない。あるいは、人間が潤うために他の動物が絶滅していくなんで、これもフェアじゃない。それと、今の世代と後の世代というフェアさもあると思うんです。今の世代のことばかり僕は考えてきたわけで、これから生まれてくる子どもたちに一体どういう世界が残っているのかということに対してですね。フェアトレードはこういう考え方にもとづいていて、カフェスローやナマケモノ倶楽部は、こういう考え方についての出会いの場であり、学びの場としても機能させたいと思ってつくりました。

スローフードも、実はそういうことじゃないですか。フェアトレードは国際的な関係と思われているけれども、実はここ仙台の街と近隣の町村との関係も一種のフェアトレードでしょう。その間のフェアさ、自分が食べる物がどこから来ているのか、どうやってつくられているのか、そういうことが見える関係性のつくり直しが僕はスローフードだと思っているんですけれども、そういうことを体現できるような場

所ができないかなと。で、やってみたらできたのがカフェスローです。何とか今のところつぶれないでやっています。

その後、いろいろなところから問い合わせが来たので、それなら、とにかく似たようなことを考えている人はどんどん応援しちゃうよ、という感じになってきました。そのうち「世の中にいいことをして、そこそこもうけてみませんか」とアピールを出そうかなと思っています。会社を早期退職して、退職金をもらってこれから夫婦で何か小さなカフェでもやりたい人がいたら、ウチに生きのいい若いのがいます、焙煎から何からノウハウを持っています、そして我々は海外とのつながりもあってフェアトレードをやっていて有機無農薬の最高のコーヒーもありますということで結びつき、そういうカフェがいろいろなところできて、それがノードとなって地域の中で機能していく。すると地域ももうちょっと楽しい場所になっていくと、そんなことも考えているんです。

こうした広がりやつながりを助ける一つの手段がスローマネーです。僕は何にでも「スロー」をつけて考えてみるということをやっていて、ちょっとしつこいんですけど(笑)、要するに地域通貨<sup>14</sup>です。今までのお金って、どうしてもトラブルの原因だったでしょう。何かお金が絡むと友情も壊れたり、恋愛も壊れたり、夫婦も別れたり、いろいろするわけだけれども、つながりが壊れるお金から、むしろつながりを取り戻したり、活性化させたり、つながり直す、違うつながり方をするのを助けるお金があってもいいんじゃないか。もちろん、つながりは時間がかかりますから、それをスローマネーと呼ぼうということです。実際、ナマケモノ倶楽部でもつくりました。

**渡辺**——はい、先日一ついただきました。

**辻**——それはナマケという名前の通貨です。500ナマケ使うと500円兌換たという、ちょっときつい冗談も入っているんですけども、この特徴はフェアトレードと組ませたことです。エクアドルにしかない「タグワ」というゾウゲヤシの実を素材に使っています。象牙というのはみなさんご存じですよ、象を殺してとるわけですから、これはひどいですね。いちいち象を殺さないとお金がつくれないのでは話になりません。エレファンティズムということを提唱する坂本龍一さんと出会ってから僕もエレファンティストになりまして、象牙に代わるものとして、ゾウゲヤシというヤシの実に着目しました。これであれば、木も切らなくていいんです。木の実からとるわけですから、持続可能な産業として向うで注目されています。それをわざわざ使ったコインです。このコインは一つ1000ナマケです。真ん中の穴も三

#### 14. 地域通貨

CHAPTER2の8 (P41)を参照。

角があったり、四角があったり、丸があったり、いろいろですが、全部1000ナマケです。紙幣の方は、エクアドルのスラムの中の人たちがごみ箱から紙を拾ってきてつくった再生紙を使っています。エコパペル（エコペーパー）というんですけども、それで500ナマケと100ナマケの紙幣をつくりました。

基本的にはどうなっているかという、たとえば1000ナマケというのは1000円で買っていただくわけです。その1000円から原価や事務経費や輸送費全部差し引くと700円ぐらい浮くわけです。それを僕が懐に入れるとちょっとマズいんですが、これはそのまま環境基金になっているわけです。だから寄付なんです。要するに僕は寄付をいつもしているわけだけれども、寄付をしていると同時に地域通貨をふやしていこうという。この基金は向うで環境活動に使われるんですけども、特に僕がしたいのは向うの地域通貨を助けるということです。エクアドルにも大変盛んな地域通貨の運動がありまして、食べ物やいろいろな地方で交換するのに地域通貨を使っています。でも、ガソリンは地域通貨で買えませんから、それらにはやはりドルが要る。そのドルを寄付することによって、向うは地域通貨を盛んにさせていくという、こういうフェアトレード的な仕組みを持った地域通貨は多分世界では初めてではないかと思っています。

**渡辺**——これはナマケモノ倶楽部の人たちやカフェスローのお客さんが使っているんですか？

**辻**——そうですね。一応クラブ内で流通させようをつくった通貨なんだけれども、これはもう同意さえあれば他でも使ってもいいんです。通貨の本質というのは同意なんですね。みなさんご存じでしたか？ つくっていいですよ。2人の間に同意さえあれば2人でつくってもいいんです。「これをお金と認めるよ」となればそれでいいわけです。だから、ナマケモノ倶楽部会員であろうがなかろうが、やりとりが成立すれば地域通貨として機能します。

**渡辺**——今、いろいろなところで「やりませんか」という呼びかけをされているのでしょうか。

**辻**——そうです。ただ、僕らは全部がナマケになればいいと思っているんじゃなくて、ナマケ方式というものを宣伝しているんです。たとえば仙台にあるグループがあって、福祉でもいいし、環境でもいい、何か地域通貨を考えていらっしゃる方がいたら、ぜひこの方式を使っていたら、同じ材料を使っていたらとすごく僕らはうれしいわ



けです。それだけ第三世界に向けての支援が同時にできる。支援や寄付をしながら、同時に地域通貨で遊ばせてもらうという。

**渡辺**——ナマケじゃなくてもいいんですね、単位は。

**辻**——いいんです。単位は違って、同じ方式でやってくれると何が楽しいかという、互換性ができますから、仙台に来る、あるいは郵送でもいいですけども、仙台でナマケを違う通貨と交換できるという、そういう輪がたくさんできていくとどうなりますかね。これは関西の方で環境教育のワークショップに行っていたときに500ナマケと交換した500チャコです。

**渡辺**——それはどこの地域通貨ですか。

**辻**——関西の里山倶楽部<sup>15</sup>の通貨ですが、「チャコ」というのはチャコール、つまり炭です。これは世界初じゃないかな、炭本位制。

**渡辺**——なるほど(笑)。実際、炭のイラストが入っていますね。

**辻**——ちゃんと裏づけがあるんです。金本位制というのはご存じですね。今はもうないのですが、金本位制というのはその貨幣を持って行けば金がちゃんともらえるということだったわけです。

**渡辺**——じゃ、これは炭に替えられるんですか。

**辻**——そうなんです。500チャコは500グラムの炭といつでも交換できるんです。これは画期的ですね。驚きました。そして、考えてみれば、炭というのはかつての日本の伝統社会の中では多くの山村で最も基本的な物資ですね。場所によっては米よりも基本的なものじゃないですかね。米も日本で長く通貨だったわけですけども、それと同じように炭というのが再び脚光を浴びている。もちろん炭の産業というのが里山というものをずっと育ててきたし、その里山の中に人間がいっぱ抱かれるようにしてずっと暮らしをしてきたわけですから。

**渡辺**——それから、夏至の日に電気を消そうという「100万人のキャンドルナイト」<sup>16</sup>のことでですけども。

**辻**——ぜひこれはみなさんに呼びかけたいと思います。今、有志が集まり、呼びかけ人を募っていいよ動き出すところなんですけれども、

#### 15. 里山倶楽部

大阪府南河内郡河南町持尾を本拠地とする団体。里山の自然と生活に密着した活動を一年を通して実践することを目的に1995年に設立した。

#### 16. 100万人のキャンドルナイト

NGO 発の自主消灯運動。「でんきを消して、スローな夜を」を合言葉に、2003年の夏至、日本全国に呼びかけた。環境省推定で500万人が参加したとされている。





100万人のキャンドルナイト  
(2003夏至／広島・尾道)

今年6月22日の夏至の日、夜8時から10時まで2時間、電気を消そうということなんです。まず、みなさんに参加していただきたい。今年はちょうど日曜日が夏至の日で、みなさんその時どこにいらっしゃるかわかりませんが、どこにいるにしても2時間消してみよう、と。あとはもう自由です。それだけでいいんです。もうちょっと徹底したいという人は冷蔵庫も2時間ぐらい抜いてみようとか、一切ブレーカーを落としてしまうとか、真っ暗やみの中にいるんだという人もいるかもしれないし、キャンドルを灯して好きな人とゆっくり過ごすなど。

前にナマケモノ倶楽部でもやっているんです。自主停電という形で去年も一昨年もやったんですけども、そのときに2時間どう過ごしたかをまず夏至の日までいろいろ出しあうわけです、私はこういうことをする予定だとかをメーリングリストなどで共有する。そして、実際に自主停電が終わった後、私はこうしましたと改めてレポートするんです。中には「子どもとろうそくを灯してお風呂に入りました」「子どもと連れ立って星を見に行きました」と、本当にいろいろな時間の過ごし方が出てきました。僕は僕なりに、他の人はその人なりに想いを込めるわけです。たとえば脱原発でもいいし、イラクへの戦争反対というのがあるでもいいし、もしかしたら全然違う願いを込めている人もいるかもしれないですね。でも、人それぞれでいいじゃないか、想いを込めるというのが大事なんじゃないか。

とにかく、ただそれだけの行為でみんながもう一回つながる。ここでの呼びかけの言葉が「夏至の日みんなで楽しく地球とつながろう」。企業や生協、自治体など、いろいろなところから呼びかけています。既に非常にいい反応がいろいろなところから出ていますので、ひよっとすると100万人どころじゃなくなる可能性もあります。このFM局でも呼びかけてくださるといいなあ。

**渡辺**——電気を消したら電波が飛ばなくなるけど(笑)、スタジオの電気くらいは消せますね。

**辻**——暗やみの中でラジオを聞くというのもいいですね。

**渡辺**——聞く方は電池で聞けますしね。

**辻**——僕自身はテレビは好きじゃないんですけども、ラジオならなぜか許せる。

**渡辺**——メディアテークもろうそくにしちゃったらどうでしょうね、

その日は。

**辻**——坂本龍一さんも非常に喜んでくれました、呼びかけ人の先頭に立ってくれました。これからいろいろな形でやっていきます。ウェブサイト (<http://www.candle-night.org>) も、だんだん充実させていきます。

このウェブサイトでは、参加団体も募っています。(参加団体リストをみせながら) この中にどんなに過激でもかまわないので主張をこめてください。各団体の主張は、個別に思い切り出してもらって、ただ僕は電気を消すだけを共有したい。そうしないと、つながりたい人もつながらなくなる。話は変わりますが、僕が最近好きな言葉は「脱米」など。「脱」というのが好きです。だから怠けるのイメージは「脱」、脱原発もそう。

**渡辺**——「反」ではなくて。

**辻**——そう、「反」ではありません。脱米というのは、もうそろそろアメリカを卒業しようということ。僕なんかは完全にアメリカ世代です。アメリカ文化ばかりで育ったし、聴いてた音楽もアメリカのものばかりだし、アメリカに長く住んでしまった。今だってアメリカは好きなのところがいっぱいあるんだけど、もうそろそろ卒業、子どもは育ったらやはり卒業していかねばならない。

**渡辺**——電気というつながりで、函館のことをチラっと話しましょう。辻さんと初めてお会いしたのは1ヵ月ぐらい前ですね。その時、函館にちょうどいらして、函館に市民の手で風力発電所づくりを目指した「北海道自然エネルギープロジェクト」(エネプロ) というNPOがあって、その代表のピーター・ハウレット<sup>17</sup>さんという方からご紹介いただいたのがキッカケです。ピーターさんとは僕も以前から顔見知りだったんですけども、突然電話がかかってきて、「スローフードを食べる会に辻信一さんが来られるので、ぜひ参加しませんか」と誘われたんです。出掛けていったら、ちょうど隣に辻さんが座っていらして、夜、ろうそくの灯のほの暗い中で、何か不思議な料理を食べましたよね？

**辻**——北イタリアの家庭料理でしたね。

**渡辺**——そこのレストランの料理人が修業に行った先の土地の料理を、30人ぐらいの方といただきながらお話をさせていただきました。

#### 17. ピーター・ハウレット (Peter Howlett)

北海道自然エネルギープロジェクト代表。この団体は、2001年秋に北海道南部、函館市の市民を中心に結成された。風力や太陽光などの自然エネルギー普及に取り組んでいる。

18. セヴァン・スズキ  
(Severn Cullis-Suzuki)

1979年カナダ生まれ。幼いころから環境問題に関心を示し、国際会議への参加、「国連地球憲章」制作に青年代表として携るなど、旺盛な環境活動を繰り広げる。2002年にイエール大学を卒業後、NGO「スカイフィッシュ・プロジェクト」を立ち上げた。2003夏、『あなたが世界を変える日』を出版。

もう少し、そのピーターさんのエネプロについて話すと、彼らは風力発電を身近なものに感じられるワークショップもやったりしていました。辻さんも連載されている『ソトコト』という雑誌で、ちょうどその時の記事が載っていますが、このワークショップには、セヴァン・スズキ<sup>18</sup> というカナダ出身の若い環境活動家も参加していました。

**辻**——そう、セヴァン・スズキという女性は、1992年にリオ・デ・ジャネイロで開かれた地球サミットの時に、大人たちを前に衝撃的な演説をやったんです。当時まだ12歳です。その時、ロシアのゴルバチョフやアメリカのアル・ゴアといった政治家がとにかく感動して、リオのサミットで一番いい話だったと。その子が10年たって22歳の女性になっていまして、国際的にも大活躍しています。彼女を日本に呼んで、一つのロールモデルになってもらって日本の若者にも元気を出してもらおうという趣旨で、九州から函館まで全国ツアーをやったんです。そのとき函館でエネプロが呼んでくれました。(『ソトコト』のウェブサイトを観ながら) こんな棒みたいなのを持っているでしょう？昔の学生運動なんかで機動隊と闘っている学生みただけけれども、あれは実は手持ちの風力発電機なんです、ああいうふうにして風にかざすとくるくる回って手元のランプが光るんです。それをつくって、みんなまで遊んでいるところです。

**渡辺**——大学のプロジェクト学習の中で、学生が子どもたちに教えながら一緒に風車をつくったんですね。

**辻**——そうです。ピーター・ハウレットさんは、本業は函館ラ・サール高校の先生なんですが、彼らとともに今やっているのはナマケモノチャレンジ(ナマチャレ)という運動です。何かというと、自分のうちにカレンダーを貼って、毎月の電気代を前年の同じ月に比べて500円少なくする運動なんです。その500円を自動振り込みにして、それを資金にして市民風車を建てるのが目標です。つまり、ナマケモノ的ライフスタイルを通して電気の大量消費を怠けつつ、自分たちの発電風車を建ててしまおうと。これが着々と進んでいるんです。で、そのスローフードを食べる集いで渡辺さんに会って、やっていらっしゃる「ハコダテ・スローマップ」<sup>19</sup>の話のうちがって感激したんですけども、ちょっとそれを説明してください。

**渡辺**——まだ見せられるものもないので、説明だけ。グリーンマップという環境マップをつくる活動がニューヨークから始まって、今や世界で200以上の都市で取り組んでいます。その函館版をつくるのが

## 19. ハコダテ・スローマップ

「スロー」をキーワードに、函館の隠れた魅力を「ゆっくり」「じっくり」発見ながら、情報を地図上にデザインする活動。「グリーンマップ」の用いる世界共通のアイコンを採用している。

スローマップです。もともとニューヨークで始めたのは、ウエンディ・ブラウアーという女性のデザイナーです。このマップの特徴は、アイコン（絵文字）を125種類決めていて、このアイコンを使って各地で自分たちの街のエコロジカルな資源や文化的な環境や、あるいは逆に環境に非常にネガティブな影響を与えている場所を、みんなでフィールドワークをしながら地図の上に視覚化していくと。そして、地図をつくっておしまいじゃなくて、その地図を手がかりに、もっといい感じの場所をつくっていかうとか、あるいはここはもっと何とか改善しなくちゃいけないねとか、そういうまちづくりのコンセプトをみんなで共有して次の活動につなげていくというものなんです。

**辻**——『情報デザイン入門』にも、そのウエンディさんのコメントが載ってますね。「都市に住んでいる人々が自分の周りの環境とのエコロジカルなつながりを再発見するためのツールをつくりたかった」と。どんな場所が出てくるかという、コミュニティガーデン、ファーマーズマーケット（直売所）、堆肥づくり用のコンポスト、ソーラーパネルを使った案内板、化石燃料を使わないワークバイク（リヤカー）のレンタル、犬を走らせてもいい公園、星空を眺められる場所などなど、と。面白いですね。

**渡辺**——普通の地図では、駐車場やガソリンスタンド、コンビニなど、そんな情報は確かに便利ですよ。でも、グリーンマップではそういったことが一切載ってなくて、市民農園や、あるいは伝統的な医療術、たとえば気功を教えているところとか。普通の地図には載ってないけれども、これからのライフスタイルに大事になっていくような、あるいは、みんなで大事にしていきたい、残していきたい場所の情報を地図にするという活動です。

僕は、何であえて「グリーン」マップじゃなくて「スロー」マップにしたかといえば、函館には歴史が古い街並みが残っていて、経済的には非常に衰退している、でも何かゆっくりと時間が刻まれているような雰囲気を持っているので、そのスローな感じを大事にしたいという想いを込めているんです。実際に函館に住んでいる人の多くは、今や郊外の住宅街に家を持って、車をたくさん走らせてロードサイドショップで買い物をするという都市的なライフスタイルにどンドンなっています。でも、何か函館のスローな感じをもう一回取り戻してもいいんじゃないかという意味合いの地図なんです。

紙の地図とウェブサイト (<http://www.slowmap.org>) の両方でやっていきます。

辻——仙台でもぜひやったらいいんじゃないですか。

渡辺——仙台でもやりたいという人がいたら、連絡くださいね。

辻——こういうことを日本のいろいろな地域で町単位でもいいし、市でもいいし、村でもいいんだろけれども、自分たちのスローマップがどんどんつくられていくと面白いな。ここに星空が見える場所というのがあったけれども、もっと文化的なことがあるじゃないかと思うんです。安らぐ場所というのがあるじゃないですか。どんな都会のど真ん中でも自分はここに来ると安らぐとか、この音を聞くのが好きとか、いろいろなスポットというのがあって、それをどんどん見つけて自分自身のマップをつくっていく。

渡辺——では、最後にもうちょっとスロープレイスについての辻さんのお考えをお聞きして、前半は締めたいと思います。

辻——僕は、極端に言うと、「世界を救うのは美しさと楽しさと安らぎだ」と言っているんじゃないかと思っています。僕らが今大変な問題の数々を抱えているというのは確かなんです。その問題をどうやって解決するかという、運動に関わってきた人たちは、自分を含めてですけれども、なぜか楽しさのことや美しさのことや安らぎのことをあまり話してこなかったし、なぜかそういうことに関心をあまり持っていなかったんですよね。そういうのはアーティストや、エンターテイナーなど特殊な人たちがやることだと捉えていた。だから、僕は一人ひとりがもう一度そういう感覚を取り戻していけたらと思っています。さっきの生きる技術じゃないけれども、それをしない限り、もうダメなんじゃないかなという気がしているんですね。ですから、渡辺さんのスローマップも、そういう意味で非常に大きな意味を持っているんじゃないか。僕たちの暮らしの場所の中に美しさ、楽しさ、安らぎを取り戻していこうよということでしょう？

渡辺——そうですね。みんなでワークショップをやりながら地図をつくっていく、それを楽しくやるということなので、基本的にはいかに高精度な地図をつくるかということじゃなくて、そのプロセスを楽しむというのが多分一番の大きなテーマだと思ってやっています。みなさんからご質問やご感想などあったらお願いします。ではそちらの後ろの方、どうぞ。

参加者 1——宮城環境教育ネットワークという団体で、環境教育の活

動と学校をつないでいく活動をしています。ずっと渡辺さんにうかがいたいと思っていたのはスローマップのことで、仙台でもつくったらいいんじゃないかということでしたが、実は仙台市でも地図情報システムにさまざまな情報を重ね合わせていくことで、地域資源を視覚化することを検討しています。私が抱えているイメージは、たとえばどの川が汚いといった問題を顕在化することもあるけれども、スローマップ的な考え方を取り入れていけば、単に行政が情報を載せるだけではなく、情報を発見したり共有するシステムも市民と一緒につくっていくと、とてもいい形になるのではないかと、いうものです。そうしないと、行政がつくって情報を一方的に提供するだけの、よくある観光情報システムみたいな感じになってしまう恐れがあります。結局、市民が使うといっても、提供されるだけの情報を何に使えばいいのかわからない。むしろ、たとえば子どもたちと一緒に調査をやって、その過程が総合学習にもなっていくなど、いろんな地域の活動をつなげるやり方があれば面白いなと思いました。

**渡辺**——小学校や中学校の総合的な学習の時間で、グリーンマップを使って自分たちの地域を発見し直そうということは、すでに日本のグリーンマップをつくっている人たちのグループで検討が始まっています。授業で使えるカリキュラムに役立てられるような、学校の先生と生徒向けのツールキットを制作しよう、というのが具体的な中身です。これについては、後で情報源をお知らせできます。ほかに何かございますでしょうか。

**参加者2**——東北工業大学でデザインを教えています。今お話しいただいたことは、とても共感するんですが、もうちょっと私が聞きたいのは、一人でやるということではなくて、みんなでやろうよという、その部分です。ベースは個人が考えるけれども、個人が単独ではなく、みんなの持っているものを重ねたり、つなげるというのが必要だということですよね。僕もそれは何となく必要性を感じていて、たとえばITを使って、あるいは紙でもいいし、うまくみんなをつなげることができるようなものがデザインできたら素晴らしいと考えています。いずれにしても、みんなをつなげる、あるいは、やっていることを重ねていくということが、なぜ必要なんだろう？ と改めて考えてしまうんです。逆に言うと、なぜ一人ではいけなくて、なぜみんなですれをやらなくちゃいけないかという、根本的な理由なのですが。

**渡辺**——なぜ一人でやらないでみんなでやろうとするの？ ということですか？

**参加者2**——要するにさっきの夏至の日の話でも、みんなが消したから、結局何なのさ？ という疑念を持つことも一方であって、けれども、みんながやるとみんなが気がつくという状況もきっとあるだろうと。

**辻**——みんなが消したら面白いだろうなと思うけれども、同時に、みんなばらばらでもいいと思うんです。行為としては自分たちのいる場所ですとやってもいいし、だれにも知られなくてもいいし、だから僕は両面あると思うんです。

みんなで行ろう、という、日本の場合は特にそうなんだけれども、通常は均質化していくでしょう。それはそれで一つのつながり方ではあるんですよ。経済社会の中では特に強い要請があって、一人ひとりの個性はむしろ非効率的なものとして見なされていた。まさに情報デザインじゃないけれども、おそらく、デザインのやり方が全く違っていったんじゃないかな。環境建築家のウィリアム・マクダナーという人が「環境問題というのはバッドデザインなんだ」と言っていました。要するにデザインの悪さの現れですよ。よくあるじゃないですか、「みんなが渡れば怖くない」、そういう「みんな主義」がありますよね、みんなで同じ歌を歌おうとか。僕のイメージしている運動というのは、決してそうではないんです。

コミュニティというのも、かつての村のイメージに戻っていくことを必ずしも考えているわけではなくて、やはり一人ひとりが違うものとして個々がノードで、それがもう一度、自分の周囲とのつながりを再構築していくというイメージです。上に立って、人々を均質的なものとして、その人たちがいるゴールに向かってつながっていけばいいというようなことには、あまり興味ないんですよ。

だから、怠けるという言葉にも、そんな想いを僕なりに込めているつもりです。もちろん、つながるといのは非常に大事で、それがなかったら生きていけない。生きるということは結局依存し合うことだし、相互につながっていればこそ生きていられる、でも一方で、つながりというのはすごくしんどいことなんです。さっき面倒だと言ったけれども、時には一人でいたいし、放っておいてもらいたい。僕はその両面がすごく大事なんじゃないかなと。どうですか？ 渡辺さん。

**渡辺**——今ご指摘があったことを僕なりに解釈すると、たとえば、実際にはそれぞれが自分の現場でバラバラにいろいろなことをやっていたとしても、このように呼びかけることで、結局みんなで一緒にやるのと変わらないのではないか、そんな問題提起だったのではないのでしょうか。

でもそれが、果たして今までとどのように違った意味があるのか？



ということをご質問されたのでしょうか？

**参加者2**——それほどまとまってないのですが、まず個人が先にありきで、その個人がどうやって自分のことを語ったり、他人のことを知ったりするかというようなことを、ちゃんと捉えていこうよ、ということだと思って聞いていたんです。それで、どうやってちゃんとやるかはいろいろなやり方があって、同じことをやってみると、あそこにああいう人がいて、ここにはこういう人がいると気がつく。グリーンマップもおそらくそうでしょう。個人でもちゃんとやるけれども、同時にそれがつながるともっとまた別なことができるという両方。今までそういうことがあまりなかったのですが、やるうよというようになってきたのかな、と最近感じていたんです。

**渡辺**——今までの社会運動って、何かどこか1カ所に集まって同じ目標でスローガンやデモをするという感じでしたよね。僕も、それは決して否定しないし、むしろ共感すらしていて、実際学生の時にたまたまそういう現場にいわせられた経験もあるけれど、当時ですら正直言って完全にのめりこめなかった。どこか違和感がありましたね。「何でそんなに全部同じように塗り固めなくちゃいけないの？」と。だから、個々人はバラバラにやっていたながら、同時につながってもいる状態をつくり出すことには、ことさら強い関心があるのかもしれない。

**辻**——『情報デザイン入門』の中でも、一番最後の方でカフェのことに触れていますけど、やはり人が集まるようになってきていると、感じられていますよね？

**渡辺**——ええ。ただ、集まるけれども、みんな同じことはしないというか、していないですよ。

**辻**——しないんだけど、何かやはり一緒にいるということの楽しさを共有している。

**渡辺**——ただ一緒にいるだけというか。

**辻**——思い出している。それは別にインターネット的なものに背反するわけではなくて、やはり一緒に集まると楽しいじゃないということに意識がみんな向いてきているんじゃないか。カフェ・ムーブメントなんていう言葉もありますけれども、それを僕も非常に感じています。もちろん伝統的な集まり方というのも非常に参考になる、でも、

それは伝統に戻っていくことではないと思っています。伝統の中でたとえば「結」なんていう、ああいう集まり方というのはすごいな、あれをヒントにしない手はないなと思います、「講」とか。今、地域通貨という集まり方をするわけだけれども、結局そういうことが今流に、息を吹き返してきているという気がします。

**渡辺**——他に、いかがでしょうか。

**参加者3**——日本語教師をしています。感想というか、思い出したことなんですけれども、さっき夜8時から10時まで電気を消しましようというお話がありました。ちょっと前にアフリカにしばらく住んでいたことがあって、アフリカでは電力がもたないので街ごとに1時からそれこそ10時まで本当に停電になってしまうんです。そうすると、街全体が真っ暗になってしまい、みんな黒人なので完全に闇の中に溶けてしまって目と歯しかわからないんです(笑)。最初は本当にびっくりしたんですけれども、ある家に住んでいて停電になったときに、懐中電灯もないのでろうそくをつけようということになりました。すると、そこにしか明かりがないので、必ずみんな集まってくるんです。集まると、否応なしに、自然と言葉が出てくる。静かな対話みたいなものがどんどん始まってくるんです。だから、先ほどの話を聞いてふとそのことを思い出して、つながるにしても、何にしても対話みたいなものがいいかなということを改めて感じました。暗やみという環境から発生した対話みたいなものが本当に楽しかったので、一度やってみるのもいいかなと思っていたので、うれしかったです。

**辻**——いい話ですね。それはぜひ、キャンドルナイトのホームページの掲示板に書き込んでほしいです。

**渡辺**——今日はたまたま、第1回のゲストの西村佳哲さんと、第2回の杉浦裕樹さんもいらっやっています。何かコメントあったらお願いします。

**西村**——こんな短い時間の中で「スロー」という言葉がいっぱい出てくるのは人生で初めてです(笑)。まず、それが面白かったです。辻さんご自身が、敢えてスローという言葉は何にでもつけてみているとおっしゃってましたが、一種の遊びなのかなと僕は思ったんです。そして、お話をうかがいながら思い出していたのは、自分自身の断食の体験のことなんです。

渡辺さんをご存知ですけれど、それはかなり壮絶な体験でした。東京

の神楽坂にある断食道場で、働きながら、スポーツジムにも通いながらできる断食、というのが売りだったんです。全部で5週間ぐらいのプログラムなんです。最初、断食をしている最中も水はずっととれるんですが、その水のとり方を習う1週間があって、その後の1週間で毎日8分の1ずつご飯を減らしていくんです。減食期間というのが1週間あって、その後本断食という本当に何も食べない1週間があるんですけれども、何が面白かって、その減食していく1週間がすごいです。ご飯が毎日ちよつとずつ減っていくんですが、ある日、半分になるんです。それが結構大きな転換期で、だんだんご飯の食べ方が変わってくるんです。すごくゆっくり食べるようになってくるんです。最後の日はご飯が8分の1なんです。これぐらいの8分の1のご飯を2時間ぐらひかけて食べるんです。一気に食べられないんです、何かいとおしくて、いとおしくて(笑)。

そのことをスローフードという言葉が流行り始めたときに思い出したんです。あのときにいろいろなことが変わったんだなあ、と。食べ方が変わることで味も変わるし、食べるということに対してうんと鮮明になるというか、目が覚めた状態になっていくんです。だから、スローフードというのも大事だけれども、結局はスローイーティングだよなと思っていて、のんびりやるのが大事なんじゃなくて、ゆっくりやることで何か満たされるようになっていく。充実感があるとか、満足感があるとか、そういうことの方が大事で、暮らしの中にそういう時間がたくさん増えていくことが、スローの根本にあると思いました。

**辻**——本当にそうですね。僕は引き算が好きなんです。僕らの社会というのは足し算ばかりやっていて、引き算というのは、さっきのプラグを抜くじゃないけれども、後退というイメージしか持っていない。でも、引いてみると実は得ていく、広がっていく、まさに今の経験はそうですね、だんだん引いていくと逆に可能性が広がっていくみたいな。

**西村**——自分の経験として断食はお勧めしないんですけれども、減食はお勧めしますよ。8分の1になったらまた1週間後に戻ってくればいいんです。それでちゃんとやせもするし、ダイエットにもなるし、食べることですごく鮮烈な体験ができてとてもおもしろいのでお勧めします。

**辻**——やってみようかな。さっきユダヤ人の話をしたけれども、彼らにも丸一日食べないという儀礼があるんですね。聖なる日に。それはやったんだけど、今のはやってみたいですね、だんだん減らしていくというのを。面白そう。だんだん増やしていくというのも不思議

でしょうね。断食の後はどうなんですか、やはりだんだん増やしていくんですか。

**西村**——断食の終わった後、今度は補食期間といって元の食事に戻していく期間になるんです。減食は1週間ですけれども、補食は2週間かけて戻すんです。これがまたすごく面白い。何日目の何食目は何を食べていいというのが決まっているんです。豆腐を4分の1食べられる日が二日目に来るんですが、その日のために最高の豆腐を買ってスタンバイするんです(笑)。あれは豊かな時間になる。

**渡辺**——では、杉浦さんはいかがですか。

**杉浦**——辻さんとは「BeGood Cafe」<sup>20</sup>で最初にお会いして、それからまた去年、横浜でアーステイのときに来ていただいたりして、またここでもお会いして、またこの先もいろいろ出会いをつくっていきるといいなと改めて思いました。

話をおうかがいしていて思ったのは、いろいろなプロジェクトや人が集まる場をつくったり、たとえばセヴァン・ズキさんのお話もそうでしたが、何か伝えたいメッセージがまずあって、それを伝えるためにどういう場や仕掛けがあったらいいかを考えて実践している、そのアプローチの仕方がすごくいい。カフェでも、たまたま友達と一緒に来た人が手に取ったものから環境のことを感じたり、地域通貨のナマケにしても、場のつくり方自体がとても素敵だと思います。

**辻**——横浜のときは本橋成一<sup>21</sup>さんと一緒に？

**杉浦**——そうです、『アレクセイと泉』という映画を撮った。

**辻**——あの映画との出会いというのは僕にとって大きかったですね。まだご覧になってない方は何かの機会にぜひ見てください。

**渡辺**——もうお一方、感想がご質問あったらお願いします。

**参加者4**——このセッションには初めて参加しました。今スローという考え方に興味を持っていて、辻さんの本も読ませていただきました。自分自身スローな人間というか、鈍くさいというか、そんなところがあるのですが、今までわりとそういうのは社会の中で悪というか、罪悪感、劣等感のように捉えられてきました。辻さんは、先ほど何にでもスローをつけるとおっしゃっていたんですけども、いいスローと

## 20. BeGood Cafe

CHAPTER2の11(P48)を参照。

## 21. 本橋成一 (もとはし・せいいち)

1940年生まれ。写真家、映画監督。九州、北海道の炭鉱に働く人々を撮った作品により、68年の第5回太陽賞を受賞。その後、労働者の息遣いを生々しく感じさせる写真を展開。1997年にチェルノブイリを撮ったドキュメンタリー映画『ナージャの村』を監督、写真展も行い、数々の賞を受賞した。第二作である『アレクセイと泉』(2001年)もチェルノブイリを舞台にしている。

悪いスローというのがあるのかなと思ったのですが。

辻——いいスローと悪いスロー、それはあるでしょう。たとえば、約束の時間にいつも遅れてくる、そういうのは余りよくないでしょうね。たとえば、競争すればやはりはやい方が勝つわけでしょう。僕は競争を否定しているわけでもないし、はやいことの素晴らしさというのはいっぱいあると思うんです。でも、全てが黒か白かという考え方じゃないと思うんですね。競争だって競争が僕らをワクワクさせることもあるし、刺激したり、励ますことがありますよね。何かゲームをやっ  
て競っている、それが自分の励みになるということは確かにあると思います。でも、問題なのは、いつの間にか僕らが競争しかない、ファスト(はやい)しかないと思い始めているんじゃないか、そこなんです。僕は歩き方には二つの種類があると考えていて、本でも少し書いているんですが、一つはA地点からB地点に移動するという歩き方です。目的はB地点に達することだと考えれば、そこにいかにはやくエネルギーを少なく効率的に達するかという命題が成立するわけでしょう。これも一つの自由です、そこにいかにはやく達することができるかという自由。その自由を否定できるかという、僕は否定できないと思います。人生のさまざまな場面ごとに目標をたてて、そしてそこに向かってどう進んでいくかと計画をたてる、これも人間が人間である一つの証しだと思うんです。ほかの動物ではそうはいかないですね。でもそれに対して、もう一つ歩き方があるじゃないか。それは何かというと、散歩です。散歩というのは何が目的だろうか。散歩というのは「散る」と書くんだけど、目的が散ったような状態というか、突出したこれだという目的がない状態ですね。だから、そこでは道草もあるし、遠回りもあるし、寄り道もいい、油を売ってもいい、人が通りかかったら立ち話もいい、引き返してもいい、しまいは迷ってもいいんですよ、迷っても楽しい。何をやってもいいわけでしょう。こんな何でもありの自由な空間や時間というものが、僕たちは人生の中に一体どれだけ残っているのか? と言いたいわけです。

ただ、人生というのは散歩なのか、A地点からB地点への移動なのか、どちらか選べと言われても、これまた困ります。要するにどちらもあっていいんじゃないか。でも、いつの間にか僕たちは人生というのはA地点からB地点への移動であるかのように思い始めていて、だから65歳まで必死に走り続けて、ふっと「あれ、どこに向かって走ってきたんだっけ」と呆然とする。

さきほどから言っている、人を愛する、友達と話す、好きな人たちと集まって歌を歌う、踊る、酒を飲むとかは、どちらかという散歩的な時間ですよ。そういうものを効率の名のもとに切り捨ててきたけ

れども、僕らに今必要なのはそういうものを一つひとつ取り戻すことじゃないか。

自然とのつながりと軽く言うけれども、人間が生きていくときに、一番根本的な快樂が自然とのつながりにあると思います。子どもたちは今テレビゲームに夢中で、これが快樂だと思っています。それを「そんなのは快樂じゃない」と言っても仕方がない。それも確かに一種の快樂なんでしょうから。でも、一方できれいな川においていて遊ぶという、とてつもない楽しさはもう本当に奪われているわけです。たとえば作家の立松和平<sup>322</sup>さんが「川で遊ぶガキ『川ガキ』は絶滅危惧種だ、レッドデータに登録すべきだ」と言っていました。もしかしたら僕らは川で無我夢中になって遊ぶために生まれてきたのかもしれないし、たき火を囲んで歌を歌ったりするために生まれてきたのかもしれない、そういったことの方があまりにもおそろかにされてきた。僕は環境破壊というのは、こういう快樂を見失ってしまったところに実は本当の原因があるんじゃないかなという気がしています。食べることだってそうじゃないですか。食べてうまいときに、このために生きているんだなというのがないじゃないですか。

**渡辺**——人を愛したり、友達と話したり、仲間と集まって歌ったり踊ったりする時間が散歩的な時間だということですね。今まで切り捨てられてきたことを、もう一度見直し、取り戻すことが、いいスローというわけです。辻さん、ありがとうございます。

## 22. 立松和平 (たてまつ・わへい)

1947年生まれ。早稲田大学在学中に『自転車』で早稲田文学新人賞受賞。『毒一風聞・田中正造』で毎日出版文化賞。近年は自然環境保護にも取り組む。